essay

「恵まれた大地」

その２　夏

広い畑の草とり　終われば壮観

士別市上士別　農業

五十嵐　紀子

山々が濃い緑色に染まり、ニセアカシアの白い花々が風にゆれるたび、シャランシャランと涼やかな音が聞こえてくる山の夏。

五月末から鳴きだしたエゾハルゼミやカッコーの泣き声が一段落する頃、我家には毎年実習生がやってきます。

六月中旬から七月中旬までは愛媛県立農業大学校の一年生が、七月中旬から九月上旬には、私の後輩の恵泉女学園短期大学園芸生活学科（神奈川県）の女子学生たちがやってきます。その間をぬって、酪農大や畜産大の学生などもやってきます。

昭和六十年から本格的に受け入れだした実習生たちは、すでに二五〇名以上になり、中には結婚し、新婚旅行で訪ねてくれたり、子供を連れて来てくれたりと、まるで自分の娘が里帰りするような心持ちです。

今までの数ある実習生の中で、とても印象に残っていることがあります。それは、最初に受け入れた実習生でした。

彼はとても気のつくやさしい子でしたが、魚が嫌いでした。

私は、彼が気分良く過ごせるように、二週間の実習中、魚を献立にはのせませんでした。彼はとても満足して帰っていきました。

しかし、数日して彼のお父さんから手紙が届きました。一通り息子さんの実習のお礼が書いてありましたが、こうも書いてありました。『常々、息子には何でも食べろと言ってきたが、魚だけは食べず、せめて他の人の家ではそんなワガママはしない

五十嵐　紀子（いがらし　のりこ）さん

仙台市生まれ
恵泉女学園短期大学　園芸生活学科卒
1977年　新規就農
夫　　広司　51歳
長男　直人　26歳
長女　恵　　23歳
二男　信人　20歳

現在75.2㌶で酪農を中心とした立体農業を展開中。
栽培作物：缶詰用トウモロコシ・ビート・カボチャ
ジャガイモ・小豆・小果樹

夕食時に実習生の誕生パーティー

だろうと思っていたが、息子は実習中一度も魚は出なかったと喜んで帰ってきた。子供の身体のことを思わない親はいない。できれば遠慮なく魚を出してほしかった』というものでした。

私は強い衝撃を受けました。相手のことを本当に思うのならば、ワガママを認めるより愛のムチが必要だということを知ったのです。

たとえ憎まれても彼ら、彼女らが親になった時に感謝されるようにと、私たちの実習生に対する姿勢も決まってきました。

実習生と初めて顔をあわせた時、私は必ず次のことを聞きます。

「嫌いな食べ物なあに？」と。

この頃は食物アレルギーの学生も多くなりましたが、それ以外の嫌いな食べ物は努めて献立に入れています。それも、初めはわからないように・・・。食べたあと、その材料を教えますが、ほとんどの学生が苦もなく食べてくれます。

また。食べず嫌いの学生もいますが、その人が最初に口にした味覚の善し悪しで嗜好が決まってしまうようで、おいしい本物の味を知らないことが多

女の子でもチェーンソー　様になってます

実習生たちと牛舎増築（屋根板張り）

仕事の合い間のひと休み

いのです。

「生のトマトは食べられるけど、トマトジュースは飲めない」といっていた子が、ゴクゴクと我家で作ったトマトジュースをおいしそうに飲む光景は、なんともいえないよいものです。

「牛乳が飲めない」といっていた子が、自分で搾った牛乳は飲んでみたいと、チャレンジしてくれたり、「朝ごはんは食べないんです」とすましていた女子学生が、ひと仕事の後の朝食を楽しみにするようになったりと、数えきれないほど多くの学生が食べ物にむかいあってくれました。

一所懸命仕事をして、楽しく食べて、ぐっすり眠るという、あたりまえの健康的な生活が送れる農家ならではの特権を、少しはおすそわけできたかなと思っています。

実習が終わっても、毎年毎年手伝いに来てくれる人や、我家の「友の会」に入会してくれたり、年一回発行する我家の新聞を楽しみにしてくれる人など、多くの人たちに支えられ、エネルギーをもらっている私は、つくづく幸せ者だなーと感じています。

今年もまた、我家のカレンダーは、来訪者の予定で埋まってきました。

この夏もまた、多くの人たちとの出会いを楽しみにしています。